

# 人生ハンド仏句

第40号

H. 17. 7. 1  
(毎月1日発行)

げしほうらく

夏至法楽

感動の一夜

住職 谷川寛俊

過日六月二十一日(火)、「夏至の夜」夜八時よりインド古典音楽の夕べ「夏至法楽」の名のもと、県内の若手アーティストたちが企画して真成寺本堂で約一五〇名の聴衆者にインド古典楽器が奏でる幻想的な音色を魅了した。

これは副住職の友人から、是非お寺の本堂で演奏してみたいとの思いで開催され、東京在住の一流の演奏家たちが弦楽器の「シタール」「タンプーラ」と、太鼓に似た「タブラ」をゆつたりと演奏、二時間半にわたる古典音楽が鳴り響いた。

特に圧巻は、第二部に登場した副住職が読経し、それぞれの演奏家たちが楽譜を持たないで、自らの感性で楽器を弾き、又女性のダンサーも入り混じっての正に異体同心の姿が

現れた。

聴いている我々も自然にその中に吸い込まれていくような錯覚を与える古典楽器とマッチした不思議な世界に溶け込まれていった。

そして十一時ごろに予定の時間をはるかに経過し、無事成功裡に終了し、その後、後片付け、夜明け近くまで反省会に花が咲き、演奏家の人達も、「今まで経験したことのない仏様との不思議な交流が感じられた。」との感想を聞かせていただいた。

特に翌朝五時のお勤めには、ほとんど徹夜の状態でありながら、太鼓の音で目が覚めたのか、本堂で一緒にお参りする姿があり、大変嬉しく思いました。大聖人のお言葉の中に「それ佛道に入る根本は信を以って本(もと)とす。

たとえ解(とんこん)も正見(しょうけん)の者也。たとえ解(とんこん)有れども信心なき物は、誹謗(ひぼう)闍提(せんだい)の者也。鈍根(どんこん)第一の須梨(じゆり)般特(はんとく)は智慧もなく悟りもなし。只一念の信ありて普明如来(ふみやうにょらい)となり給う。」(法華題目抄)

編集・発行  
玉蓮山 真成寺  
編集部  
TEL・FAX (0765)22-2268  
メールアドレス  
kokorochanthk@ybb.ne.jp  
ホームページアドレス

<http://www.geocities.jp/sinjyoujitoyama108/>

つまり、いくら解(わか)りきった事を言っても信ずる心がなければなにもなりません。自分の名前すら覚えることが出来なかつた須梨(じゆり)般特(はんとく)は信ずる心が人一倍強かつた為にお釈迦様より普明如来という名前を授けられた。それほどに信心と言うことは大切な事なのです。

そしてもう一つ驚いたことは、朝食後用事があつて本堂へいってみると、リーダー格の一人がご宝前の正面に座つて静かに楽器を弾いているのです。泊めていただいたお札に、と思つて弾いているのか、或いは仏様に向かつて自らの気持ちを訴えているのか、私の心は両方に受けとられました。一人の芸術家の生き様を見る思いが致しました。

若い人達の心にも仏様を敬う素直で真面目な気持ちがあるのだと、大変嬉しく思つた次第です。いずれにせよ、インド古典楽器の持つ幻想的な靈氣に包まれた一夜でした。



夏至・・・一年中で一番昼間がなが～い日だよ！